

ふるさとこの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと“風”

第十一号（二〇〇七年四月）

風

近藤治平

風は流れ

風の流れば時の移ろい

風の移ろつ時の中に人は暮らしを紡いで

点を打つ

風は何時も明日を連れてやってくる

x x x

これという目的もなく歩いていけると、風がやってきていろいろなることを囁き、今日の私を教えしてくれる。

嬉しいとき、哀しいとき、寂しいとき、切ないとき、折々の心模様を見抜いて囁いてくれる。

風の自由自在の囁きを聞いていると、どんな自分でも納得することができる。

時には意地悪な囁きもするが、それはそれで納得させられる。

だから毎日、風に尋ねて散歩する。

風の納得させられたら小さく自分に呟いて聞かせる。

『風にのって 時を漂い言葉に遊ぶ』

x x x

ある日、日向に寝転んで考えた。

風に国境があったら自由も自在も地球上からなくなってしまうのだろうか。

次の日も日向に寝転んで考えた。

今、西の窓から東の窓へ抜けていった風の奴、アメリカにとどいても西の窓から東の窓を抜けて誰かの顔を撫でていくのかな、と。

その次の日も日向に寝転んで考えた。

風が全く流れを止めたら、時も、季節も移ろつことを止めてしまふのかな、と。

『春の陽に 節々の伸びて うらら』

x x x

風に吹かれて散歩する。

風の重さや風の色に染まって、折々の心模様の一行に呟いてみる。

呟いた一行の振り返れば、ふるさとの暮らしの一つの愉快。

『雑木林を抜けると春がいた』

菜の花の風を黄色く染めた』

x x x

風に吹かれて一本道の散歩する。

雑木林を抜けて、原を抜けて、たどり着く当てもなくへふへふと風船の風の吹くまま風の吹くまま。

何処で道を返すのかは風まかせ。

風の自由自在にこの身をあずけて、心をあずけて。

あるとき、そろそろ道を返そうかと思つたら、

かげの奴耳元にこっそり囁いた。

「恋は片道だよ」と。

それじゃあこの道は恋の一本道かと、恋詩の呟いて行き暮れて。

『恋詩のつもってひとり』

ふるさと“風”として再出発

昨年六月にスタートした「ふるさとルネサンス」がこの四月から「ふるさと“風”」と名称を新たに再出発する事となりました。私達のふるさとである常世の国に吹く風のように、自由で自在に「ふるさとの暮らし」の中に、歴史・文化の再発見と創造を考える「の視点で、私の言葉としてこの紙面に紡いでまいりたいと思っております。

ふるさとルネサンスに変わらず、「ご支援、宜しくお願いいたします。

「ふるさと風の会」編集事務局

会員募集のお知らせ

ふるさと風の会では、名称変更を機に、「ふるさと」の風として、「ふるさとの暮らしの中に歴史・文化の再発見と創造を考える」の視点を心に置いて、自分の言葉を紙面に表現していく会員を募集することとなりました。一緒に「ふるさと」の風としての言葉を紡ぎ、発表してみたい方誌末の事務局までご連絡下さい。

高野山町石道めぐり

兼平ちえこ

空海は十八歳で都の大学に進みましたが、立身出世より、仏教の教えにひかれ、出家の道を歩きました。三十一歳で得度した後、中国、唐の長安で密教を二年学んだ後、帰国し八一六年高野山に真言密教の根本道場として開創されました。

三月二十五日、午前九時十五分、出発。

標高約九百メートルの地に建てられた伽藍に向って九度山の慈尊院（女人禁制の高野山へ入山を許されず、この地で亡くなられた空海の母大公廟）から、高野山へ通じる参詣の道は表参道にあたり、「高野山町石道」と呼ばれ、五輪塔形の町石百八十本が一町（約一〇九メートル）毎に建てられていました。

仏教では、宇宙を形成する物質は空、風、火、水、地の五つの要素からなる」とこかれ五つの要素を宝珠、半月、笠、円、方形にかたどった五輪塔は、最初は人々が深い山の中で踏み迷わぬようにと、木製の卒塔婆を建てたのが、のちの町石の原型となりました。

生憎の雨と風。

雨風に打たれながら眼下に紀の川を一望する。

滝のように流れる細い道をあえぎながら登ったり、下ったり。横ばいの可愛い力二、雨に大喜びのかたつむり、元気な力エルに励まされる。

十二時頃、朱塗りの太鼓橋が目に見え込んでくる。天照大神の妹君である丹生都比売（につひめ）を祭る丹生都比売神社に到着。

待っていたあたかいバスの中で昼食。ホッと一息。まだ降り続く雨の中、元気を取りもどし、町石の数が減ることを祈りながら、女人禁制の時代に思いを馳せ、黙々と足を進めていく。限りなく続く信仰の道、道。

待ちに待った壇上伽藍と称する聖地の大門に着いたのは、十六時頃。

高さ二五、八メートルの朱色の総門が堂々とそびえ立つ。疲れがいつぱんにふきとぶ。そこにはさまざまなお堂や塔、宿坊が並び、仏像や曼蛇羅が迎えてくれました。

更に進むこと、壇上伽藍手前の柵の中に一町石確認。まもなく朱色の大塔、町石道の基点。ついにゴール。更に奥の院へ続く三十六本の町石。

約二キロの参道の両側には樹齢数百年の杉の大樹と歴史に名を残す、諸大名など二〇万基を超える墓碑や供養塔の苔むした墓原におおわれ、この世ならぬ雰囲気包まれる。

御廟橋を渡り、大師信仰の中心聖地、弘法大師御廟。大師はこの地で八三五年三月十五日から食を断ち、座禅をすままま生きるがごとく、仏の道をきわめた聖人として御入定「死」されました。

弘法大師の『信じれば、みんな救われる』という教えに、信者や四国八十八力所の霊場を巡ったお遍路さんたちをはじめ、世界中から大勢

の人々が参詣に来られるそうです。

意外にも若い人の参詣の多いことが目に付きました。

何百年もの時を超え守られ、育てられてきたものは、歴史の重みと力強さ、美しさが感じられ、身の引きしまる思いがしました。

ふと、私のふるさとは何があるだろうかと思ったとき、高野山の重く凜とした風が町石道を駆け抜けた。

「そうだ、私のふるさとは優しい風が吹いている」

弘法大師の『信じれば、みな救われる』とは、もしかしたら「自分の暮らしを信じなさい。そうすれば自分の素晴らしさがわかります」ということなのかも知れないと、町石道を駆け抜けて行った高野山の風から、私の解釈を頂いたような気持ちにさせられました。

ふるさとの風に舞う

小林幸枝

三月二十四日、玉造手賀の一番奥にある須田帆布の須田さんが主宰されている我家我家というところで、「鹿島鉄道さよならコンサート」が開かれ、私も飛び入り参加の形で朗読舞を披露させていただきました。

甲斐さんという篠笛とジャンベのメイン・ゲストのグループの方が即興で朗読舞に音楽を付けて下さった。初めての体験でしたが、とても楽しい一日でした。

全く初めての人たちと、ジャンルの違う人達がプロとして一つの表現に対峙する時の緊張感、どう言い表したらいいのか言葉を探せませんが、楽しい事でした。近藤さんは、自分が一番と思って、他の人たちを引き連れて楽しめばいいよ、といいますがプロの人達の自分の役割の範囲を超えないで自己主張してくる気迫はすごいなと思いました。

閉会の挨拶で須田さんが、本当は何時も鹿島鉄道を利用していらっしゃる方々にお出で頂きたかったのだが、と話されていましたが、殆どの方がそうではなかった。

三月二十六日、私も終点鉾田まで一度も乗ったことがなかったため、近藤さんを誘い鹿島鉄道の旅をした。超満員で、鉾田まで立ちっぱなし。

近藤さんが途中、湖畔を歩こうというので、帰りは、八木時で降りて桃浦まで湖畔道を歩いた。少し風が強く、霞ヶ浦は波立っていたが、快晴の中とても気持ちのいい散策となった。

風が強かったのに筑波山は春霞につつまれ、ぼんやりとした姿しか見せてはくれませんでした。晩秋の暮れ方ここを歩くと夕陽が水に落ちて綺麗だよ、と近藤さんは言うが、石岡育ちのくせに私はまだ見たことがありません。

今日の鹿島鉄道はすごい人ですね、というところ、近藤さんは、鹿島鉄道もやっと廃線という文化を創ったので人が乗るんだな、とちょっと難しく私には理解の届きにくい話をされた。それで、廃線って文化なんですか、と聞いたら、そう立

派な文化だ、といわれた。近藤さんは何時も頭の痛くなるような、哲学的過ぎるような言い方をしてくれどけど、補助金をもらう事しか考えをもてなかったのですから、廃線というのは若しかしたら初めて自分達で創り上げた文化なのかも知れないと思えた。

一駅だけ歩くつもりだったけれど、桃浦駅に着いたら一時間待ち。それで小川高校前までもう一駅歩く事にした。でも途中から355号線を歩く事になってしまった。排気ガスを吸って歩きながら、線路道を自転車も通さない完全遊歩道にすれば、文化道になって、人が歩くかもしれないと思った。

特別寄稿 常世の国の恋物語

恋瀬川物語

近藤治平

あなた。

私に百の恋をくださいませんか。

私は百の舞にお返しいたします。

父は言った。

母も言った。

「恋瀬の川の橋は渡るな」と。

私はズーッと、それを守ってきた。

父は言った。

「恋瀬の川の橋を渡ったら、女はふるさとを捨てる」

と。

母は言った。

「女が恋瀬の川の橋を渡るときは、生まれた土地を捨てるとき」

と。

恋瀬の川の橋の向こうには何かがあるのだろうか、とズーッと思ってきた。

考えてきた。

でも私の結論を出すことはしなかった。

出してはいけなかった。

年頃になった。

人並みに恋をして、

人並みに女になって、

妻になった。

そして人並みに時を移ろい、暮らしをつくってきた。

これでいいのだと思ってきたし、

そう信じてもきた。

穏やかな日々だと思っていたとき、突然に子供のころ祖母から聞いた龍神山の龍の伝説を思いだした。

本当に、突然に。

だから理由はない。

龍神山の龍が若い娘に化身して、柏原池に降りてきて若い男を誑かし、その精気を吸いとり、命を奪ったという伝説物語だ。

若い娘に化身して出たのだから、それは雌の龍だったに違いない。龍神山には雌龍と雄龍の夫婦の山があるのだから。

一つの疑問が生まれた。

疑問は唐突に私を襲った。

「龍神山の雄龍は人に化身して降りてくることはないのだろうか」と。

突然の疑問に私は狼狽し、動悸を覚え思わず頬を染めた。

私は何かが起こることを待っているのだろうか。

それから、雄龍のことはすっかり忘れてしまったのだが、私の何かを待つ気持ちはズーッと続いた。

今に不満があるわけではない。

しかし、満足しているわけでもない。

このふるさとの中に、

私の、

私としての実感の欲しい。

私は何か新しいことが起こるような期待と予感を勝手に作り上げていた。

私は何を待っているのだろうか。

もやもやとした日を過ごすうちに、待っていても仕方がない気持ちになり、恋瀬の川に出かけ

てみた。

恋瀬の川を渡ろうと思ったからではない。

恋瀬の川の橋を渡るな、という言葉思い出したからでもない。

恋瀬の川の土手に立って向こう岸を眺めてみた。

何もあるはずもない。

大型ダンプが土手を揺るがして往来している。

詰まらない風景だった。

恋瀬の川も底が澄んで、ヒリヒリと私の心を映し出すような川ではない。

この川を何故、恋瀬の川と呼ぶのか。

詰まらない流れしかなかった。

幾度か通えば何かが見えるかもしれないと思い、

それから毎日この土手に立って流れを眺めてみた。

しかし、詰まらない流れは変わらなかった。

何かを予感させる淀みも渦もない

平板すぎる流れだった。

ある日、恋瀬の川の橋を渡って、向こう岸から

こちらを見れば、何かが変わって見えるのではないかと思った。

そして、

私が待っているものの正体が判るかもしれない、

と

思った。

足を進めようとしたとき、向こう岸から男が突然に川を跳び越して私の前に立ち塞がった。

そして、

私に言った。

「恋瀬の川の橋は渡ってはいけない」

「……………」

「向こう岸からこちらを眺めても何も生まれな
いし変わらない。待つというのはそこを動か
ないことだ」

男はそう言うと再びヒョイと

恋瀬の川を飛び越えて

向こう岸に帰っていった。

そして、

私に向って手を振った。

「何だ、あの男は！」

心を見透かされた嫌な気持ちになり、

男の振る手を無視して、
逃げるように背を向けた。

待つというのはそこを動かないことだ

何で

私が

待っていることを

知って

いるのだろうか。

私が心の底に何かを待っているこ

とを、沈ませていることを、誰も知

らないはずなのに。

それにしてもあの男は広い川を何で易々と飛び

越して来られるのだろうか。

もう恋瀬の川の岸辺に行くのは止めよう。

しかし、

次の日、

私はまた

恋瀬の川の岸辺に

来てしまった。

そこには男を待つ私があった。

向こう岸に男の影はなかった。

無意識に男を待ち嫉妬の焰の立てている自分に
気付いたとき、やりきれない嫌悪感が襲ってき
た。

たまらず対岸に背を向け戻ろうとしたとき、目
の前に男が立っていた。

「待つというのはそこを動かさないことだよ」

男は、私の心臓をめがけて突き刺すように笹舟
と墨書した封筒を差し出した。

私は、

その刃を心臓に受けるかのように、

そして、

それを待っていたかのように、

封筒を受け取った。

男は、私に封筒を渡すと昨日のように、「ヒョイ
と恋瀬の川を飛び越えて向こう岸に帰ってい
た。

笹舟の封筒を開くと中に風の一行が吹いてあっ
た。

「貴女に百の恋をあげましよう」

風の一行に吹かれたとき私は風に乗って蝶々に

なつた。

それから男は毎日古今集から恋歌の一首を引い
て届けてくれた。

私はその恋歌を恋瀬の川風につけて、思うが儘
に、自由に自在に舞った。

・唐衣 日も夕暮れに なるときは

返す返すぞ 人は恋しき

・忍ぶれば 苦しきものを 人知れず

思ふてふこそ 誰に語らむ

・おもひつつ 寝ればや人の 見えつらむ

夢と知りせば 覚めざらましを

・恋ひわびて うち寝るなかに ゆきかよふ

夢の直路は 現ならなむ

・かく恋ひむ ものとはわれも 思ひきに

心のうらぞ まさしかりける

あるとき私は男に尋ねた。

「何故、古今集を…？」

男は答えた。

「貴女は私のことを雄龍かと疑いもなく尋ねる
ので、千年の昔の恋歌を引いてきたのです」

と。

私はこの人を雄龍とよんだのだろうか…？

「そう、貴女は私のことをそう呼んでいました」

「私が…？」

「そう貴女が。そして貴女は、私が恋瀬の川を
飛び越してくるとも言われた。私は猛スピード

に自転車をこいであの橋を渡ってきただけなの

に」

「貴方は恋瀬の川を飛び越えてきたのでは
ない…？」

「そう、何時も自転車」

男は毎日のように恋瀬の川の向こうに、削られ
ていく龍神山を眺めにいつているのだといった。

そこに何かを待つ顔に私が毎日この土手に立っ
て向こう岸を見ているものだから、遊び心に笹
舟を書いてみたのだという。

私は直ぐに百の恋の風に吹かれて舞いに舞いた
いとこたえてしまった。

舞など一度も舞ったことが無かったのに。

男はそんな私に常世の国の平安の影をみたとい
う。

それから男は、毎日、古今集から恋歌引いて届
けてくれた。

そんな現実が起こったのだ。

私は羞恥を忘れ声にしてしまった。

「今度は貴方の恋歌をいただけますか」

男は言った。

「明日、明後日は雨です。携帯のアドレスを」
と。

・声したら 水仙花の頷いて 春の風

・春の風に舞えと野の花のいふ

・春の風に舞ったら 野の花の笑顔

・ひびけ心の音 とどけ心の声 妹に

・たおやかにたおやかに妹の舞う

・満月 妹の笑顔を映している

- ・妹よ妹よ妹よと心に叫ぶしかない
- ・明日こそと想つても 眠れぬ夜
- ・思いのとどかず 水仙花の咲かず
- ・てふてふのごとく舞に狂つて恋に狂つて
- ・恋詩の つもつて ひとり

男は毎晩同じ時間に恋詩の一行をメールに呟いてくれた。

私は夢の中に、男の呟いた恋歌を舞った。

ある夜、

男の恋歌を舞い終わつたとき、

ふと我に返つて思つた。

何時も一人芝居

無言に微笑のくれる瞳の聲に揺れ惑つ。

常世の原に

決められた時を

敷かれたレールに走り

何時も律儀に微笑みのくれる。

だが、時の埋めおわると風にのって去っていく。

常世の原に残されて一人。

微笑みの残り香に 未練のつもりゆきくれて。

恋瀬の流れに笹舟のながす。

常世の原の風のいふ。

ひらひらたよりなくてふてふ

恋瀬の渡しにしくれて流されて。

常世の原の風のいふ。

ほんきに恋をして不如帰。

男が百の恋歌をうたいおわつたら…。
私が百の恋歌を舞いおわつたら…。
私は恋瀬の川の橋を男と手を繋いで渡るのだからか。

でも、

私は、

ふるさとは捨てない。

男と手を繋いで恋瀬の川の橋を渡つても、

削られた龍神山を眺めたら、

男と手を繋いでここに戻つてくる。

私は常世の国の女だから。

＝終＝

特集 打田昇三の歴史探訪

飛鳥の異邦人

旧家の多い石岡は、鎌倉時代から戦国時代末期まで大掾(だいじょう)氏の本拠地であり大掾氏と何らかの繋がりがあつた筈である。攻めて来た敵の佐竹氏に支配された当初は、全町民が捕虜のような情けない気持ちで過ごしたのではないだろうか。

日露戦争が舞台の「旅順開城」を歌つた軍歌に「昨日の敵は今日の友」と言う文句があつた

が、その逆もある。現在、アメリカが手を焼いている国の中で、イラン、イラクは、かつてアメリカの友好国として幅を利かしており、米大陸の軍施設正門前には巨大な地球儀でそれを誇示してあつたものだ。しかし敵になれば全てが否定されて相互に憎しみだけが増す。仲良しが壊れた原因は大国のエゴもあるだろうけれど同盟国の政権交代が一番の理由であろうか。

アメリカの友好国だつたイランは、最古の君主国として1971年に建国二千五百年祭を大々的に実施し世界の注目を浴びた。式典には日本からも三笠宮が出席されている。日本がハツタリで「紀元は二千六百年」などと主張するのに肩を並べていたのである。そのイランが国王パーレビの進めた中央集権下での改革失敗により混乱し、先鋭的なシーア派拡大を恐れるアメリカに煽動されたイラクに攻め込まれて8年間の「イラン・イラク戦争」を経験する。一般にイラン・イラク戦争の勝敗は五分五分と思われているが、戦場は主にイランの国内だつたから敵密にはイランの負けであつたろう。

攻めた方のイラクも、調子に乗つたフセインが豊富過ぎる供与武器の使い道に困り国力の増大に…言い方を変えれば他国の侵略に動き出したから、イラン同様に「今日の敵」になつてしまつた。イラクの首都バグダッドは、日本の孝謙女帝時代頃に預言者マホメッドの叔父アッバースの子孫が開いた王朝(アッバース朝)が「平和の都市」として建設した場所である。アッバース王朝を開くにあつてはイラン民衆の協力

があつたといわれている。

夏の必需品・扇風機はバクダッドで発明され
たらしいが本来は執拗に襲つて来る蚊の大群を
追い払う道具だつたらしい。ティグリスの河畔
だから湿気が強く気温が高く蚊が多い。それ
も拘らず湿原に新都が置かれたのは、交通の要
衝であることと共に、シリアに拠点を置きアッ
バース家を弾圧したウマイア王朝を根こそぎ虐
殺して復讐を果たしたアッバース王朝の、悪夢
からの脱却願望があつたように思われる。ウマ
イア家は、マホメッドが属したクライシユ族中
で最も勢力のあつた家系で、マホメッドの後継
者と目されていたアリー（マホメッドの従兄弟
で娘婿）に対抗して強引にイスラム王朝を建て
世襲制にした。

一方、アメリカが心配したように王権が衰退
したイランではシーア派最高指導者のホメイニ
師がリーダーとして登場し、イスラム革命を成
就したのだが国土再建半ばで死亡、後継指導者
によりイスラム原理主義の国家として武装化し、
今や世界が注目する強国になりつつある。アメ
リカにすれば「昨日の友が今日の強敵」に変わる
のだから許せないであろうが「昨日の身内が今
日までの敵」になつて久しいイスラム圏の事情
を良くわきまえないで伝統のバツハロー狩りの
ように戦争を始めるから収拾がつかなくなる。
日本はアメリカの「昨日、今日、明日の友」ら
しいから国民としてもイランを貶してアメリカ
を褒めなければいけないのかも知れないが、実
は日本とイランとは建国の古さを競うだけでな
く、歴史の始まりの時代（二千六百年説は捨て
て）から深い関わりがあつたことが知られてい
る。敵とするか友とするか慎重な判断が求めら
れそつである。

古墳時代の次に始まると考えられる日本の
歴史時代幕開けは「飛鳥時代」になる。蘇我一
族、つまり稲目（いなめ）、馬子（うまこ）、蝦
夷（えみし）、入鹿（いるか）が権力を握つた時
代になる。蘇我氏が逆賊とされるのは馬子が聖
徳太子の叔父に当たる崇峻（すしゆん）天皇を
暗殺したからであるが、伝えられる話が短絡的
で、いかにも皇位継承に絡む権力闘争を暗示し
ている。歴史家の中には「蘇我一族も皇統であ
り蘇我馬子は天皇だつた」と主張する意見もあ
る。

天皇を生んだ磐之媛（いわのひめ）は葛城氏の
出である。
良くも悪くも日本の古代を物語として伝え
る唯一の書は「古事記」だが、その古事記に「皇
后」として特記されるのは葛城氏の始祖・武内
宿禰が支えた神功皇后と磐之媛だけであるから、
大和朝廷の成立に葛城氏が深く関わっていたこ
とが想像できる。

その葛城氏は、暴君とされる雄略天皇時代に
衰退し一時的に歴史から消えていたが、日本に
仏教が伝来したことから仏教を擁護する蘇我氏
として再び中央政権に名を連ねるようになった
というより「蘇我王朝」として飛鳥の野に権力
の基盤を築き日本を支配したのではなからうか。
「満つれば欠ける」やがて専制的な権力構造
は周囲の反発を招き、中大兄皇子と中臣鎌足ら
によるクーデターにより政権を奪われ、蘇我氏
は逆賊として歴史に留められた。記録された日
本の歴史は「大化の改新」と呼ばれるクーデタ
ー以後のものだから、蘇我氏の汚名は消えるこ
とが無い。汚名でも歴史に残つたことを喜ぶべ
きであろうか。

皇統が確立されない時代には初期イスラム
王朝と同じで有力部族の援助が無ければ天皇に
はなれず、過去に遡る由緒を持つていて後援者
が有れば皇位に就けたのだから、実質的な初代
大王（天皇）とされる崇神天皇の祖父・孝元天
皇を始祖とする蘇我氏が皇位に就いても不自然
ではない。

飛鳥に幾つもの巨大な石を積み上げた「石舞
台」は蘇我馬子の墓だとされている。古墳形式
だつたものが暴かれたという。他にも猿石、石
人男女像、亀石、酒船石など、「大和王朝は朝鮮
半島から渡来した人々によつて築かれた」とす
る通念で考えてもその用途が判らない造形物が
ある。古代史の研究にも取り組んでおられた松
本清張先生は、推理作家の優れた洞察力から飛

鳥地方の謎を解く鍵をイランに求めたが、そのキツカケとなったのは「火の道」という作品の取材で昭和48年にイランを訪れたとき、とある町の骨董屋で手に入れた瑠璃碗（クリスタル器）が奈良正倉院の御物と同じだったことにあるとか。

5年後、NHKの番組取材に同行する形で2度目のイラン行きを果たした先生はイラン各地の古都や遺跡を回って、飛鳥に残る謎の石造物の原点が古代イランにあることを突き止めた。その成果は「ペルセポリスから飛鳥へ」という著書に纏められ出版されているが歴史学会などに認められる事は無いと私は感じている。なぜならば、そこに現れたことは「逆賊」のレッテルを貼られた蘇我一族がイラン（ペルシア）系の人々を登用して大陸文化、大陸に伝わっていたペルシアの文化を日本に導入したこと、更には「聖徳太子」の事跡と伝えられていることが実は蘇我馬子の功績ではなかったか、とする疑問である。もし、これが事実であれば、中大兄皇子（天智天皇）に始まる、かつての神話を除外した日本の歴史も実は書き出しが嘘ということになってしまっただけである。

何よりも、今から1400年以上も前に、イラン人が日本に居る訳がないと誰もか思っ。しかし、ここに日本書紀に記録された一つの事実がある。それは

「齋明天皇三年（657）7月3日に親貨邏（トカラ）国の男二人、女四人が
海見嶋に漂着した」という報告が筑紫（当時は

九州全土をさす）から届いているのである。そしてさらに3年後の齋明天皇六年（660）7月16日には「トカラ人の乾豆波斯達阿（けんずはしだちあ）」という人物が国に帰りたいたいので、その妻を人質として日本に留め、一行数十人は西の国へ帰って行った」という記録もある。トカラ人とはイラン人のことである。

このように飛鳥・天平時代には朝鮮半島や中国大陸以外にも日本列島に異国人の到来があったことになる。或いはシルクロードから中国、朝鮮半島などを経て日本へ来たのかも知れない。学術的なこの問題については東京国立博物館の考古学室長や仏教大学教授、長岡技術大学教授などを歴任された杉山二郎先生が仏教伝来のテーマと同時に研究しておられるようだが、飛鳥の酒船石など造形物のルーツを求めてイランを訪れた松本清張先生は「権力を握った蘇我王朝は多くのイラン系技術者などを飛鳥に集めて西方文化を吸収していた」と推論されたようである。それによれば、謎の酒船石は「ハオマ酒」という大麻を含んだ軽い幻覚性のあるザクロ又はブドウの酒を造るための装置で、日本に来ていたイラン人が使っていたものらしいのである。

当時のイランは終末期ながらササン王朝の支配下にあった。イランを中心に一部イラクも支配してバクダッドの近郊に首都を置いたこの王朝は、中世ペルシア語を国語としゾロアスター教（拝火教）を国の宗教としていた。ゾロアスター教は古代イランの思想家で預言者のゾロ

アスターを開祖とする民族宗教で
拜火儀式、死者の鳥葬、近親婚など特異な風習を持っていたが、天国と地獄、終末思想、前世など他の宗教が主張することの大部分はこちらが本場である。

現在でもイラン中部の都市ヤズドには拜火寺院があり教徒が住んでいる。

日本に来たイラン人も宗教的なことからハオマ酒は欠かせない飲み物だったらしい。ササン朝はイランの北東部、ザクロの原産地とされるザクロ山脈の北端に興った小国だったが、従属していたパルティア（アルサケス王朝）を滅ぼし、かのローマ帝国をも再三に亘り敗北させるほどの強国となったのである。イランの歴史観を確立したのはこの王朝だと言われている。ササン朝を滅ぼしたのがウマイヤ王朝（イスラム勢力）である。

松本清張先生は飛鳥古代史研究に出かけたイランで、最初に首都テヘラン郊外にある「レイ」という町を訪れている。レイの町の中心部には「アリの泉」がある。昔、石岡の語源となったのは「岩の丘」らしいが、アリの泉も岩の丘を背にしたオアシスである。現在は絨毯などを洗濯するための小さな池になり果てたが水脈が地下を通り土手には灌木も生え茂っている。岩の丘の中腹には後世の作らしいササン王朝最後の王様像が浮き彫りで残されている。この王様の娘がシーア派の始祖アリーの血を引く男性と結婚したので、イランの人々はその系統をイスラム教の正統とササン王朝とが連続と続くものと

して重視しており、イランはシーア派教徒の多い国なのである。

レイは七千年も前から栄えた町で、旧約聖書、ゾロアスターの教典、マルコポーロの東方見聞録にも名前が出ていと言われる。勿論、東方見聞録の時代にはササン王朝もウマイヤ王朝もアッバース王朝も滅亡していたが、マルコポーロは「東洋で最も美しくバクダッドに次ぐ町」だと記したらしいから千年や二千年のことで自慢している日本の歴史とは桁が違う。イランが「世界最古の君主国」と豪語していたのも当然と思わせられる場所である。

ササン王朝と、その前のパルティアからは異国の文化がかなり日本に伝えられている。むしろ現在、私たちが何気なく身近で見ている事物の多くは、大陸

経由か、或いはトカラ人の来航に依って齎されたと考えられる。代表的な例として挙げられるのは、奈良正倉院にある壺や皿に描かれた「パルティアンシヨット」の図柄で、正しくパルティアの影響が現れている。

アレキサンダー大王の側近セレウコス将軍がトルコ、シリアなどに建国していた王朝は、紀元前250年頃から衰退を始め、それまで従属していた遊牧民族パルミ族を独立させることになった。紀元前三世紀にはパルミの族長アルサケスによりイラン高原東北部にパルティア王国が興り、首都をバクダッドの南方35キロのユーフラティス河畔に置いてイランとメソポタミアを支配した。この国の軍隊は騎馬民族らしく

馬上からの射撃を得意としていたが、一旦は退くと見せて敵に追わせ、疾走する馬上から急に向きのまま弓を射て敵を倒す戦法で脅威を与えた。それが「パルティアンシヨット」である。

話しは逸れるが西暦紀元前後の西アジアでは、ローマ帝国が東方へ進出し、パルティアが興り、中央アジアからイラン東部とインド西北部を抑えるクシャン王朝（首都ガンダーラ）がアフガニスタンに誕生し、さらに中国大陸には日本に馴染の深い「漢」が強大な勢力を誇っていた。ローマ、パルティア、クシャン、漢、この四国は対立していたけれども、交易の民は戦争に関係なく物資を東西に運ぶ。四ヶ国が交易のルートに割拠して、それぞれの領域に睨みを効かせていたことによりシルクロードが生まれたのである。そして四ヶ国のうち

半数がイラン系の王朝だったことに注目しなければならぬ。

渡来の経路と時期は問わずシルクロードのお世話になって日本に来たと思われる物を列記すれば西瓜・オリブ・メロン・プラム・林檎に始まり、キュウリ・マクワ瓜・南瓜・韭・玉葱・ニンニク・葡萄・油菜・胡椒・アサツキ・胡桃・ゴマと続き、大豆・小豆・豌豆・人参・ザクロ・無花果・アーモンド・サフラン・ほっけん草・砂糖（黍）などなどスパーの店先にも負けない。そして忘れてはならないのが医学の麻酔と養蚕技術（絹）であろう。

そして見渡せば日常生活にもイランの文化の影響が見られる。男性が寛いで座る「あくら」

は胡座と書き、明らかに西方からの伝来である。冬は炬燵だが、これもイラン人が寒さ凌ぎに始めたことでイランの民族博物館に原形が残っている。大相撲は日本の国技だと言っているが、相撲の原形はメソポタミア文明の古代バビロニアに起こり、それがインド、中国、モンゴルなどに伝わった。

しかし日本のように力士が化粧回しを締めて土俵入りしたり、派手な呼び出しをしたり、土俵が丸かつたりはしないようなので、元はどうでも「今の形の相撲」は日本独自のものと思っていた。ところがイランには「ズルハネ」と呼ばれる競技があり、これが何から何まで日本の相撲と同じだった。大都市には土俵を備えたズルハネ選手の訓練場があり、それが小さな国技館なのである。

ズルハネとは「力の家」を意味するペルシア語で始めは競技場を指す名称だったらしいが、今では格闘技全体を言う。館内には両国国技館の優勝力士掲額のように選手の写真などが壁一杯に張られており、土俵は円形（多角形）で日本とは逆に土俵が窪んでいる。普段は力士の稽古（体力訓練）が有料で公開されていて、呼び出しが太鼓に合わせて流暢な詩の朗読のように選手紹介をすると禪ならぬタイツ姿上半身裸の選手が1mほど掘り下げられた土俵の中に入って力技を披露する。小道具には扇子、弓などがあり正に大相撲の原形である。

日本に仏教が伝えられたのは欽明天皇の時代だとされるが西暦では538年説と552年説

があり、国家事情からすれば552年のほうが妥当に思える。当時、朝鮮半島では高麗国と新羅国が同盟して百済(くだら)国を圧迫していたから、国王が日本に援軍の要請をしたのである。百済と同盟する国に任那(みまな)があった。任那には日本政府の出先機関があったというが学会では否定されているらしい。日本政府も慌てなかったようだから、日本府は無かったのであろう。「頑張ってください」という応援のメールだけで済ませたような気がする。困った百済王は日本の高官が喜びそうなもので余り予算も必要としない贈り物として仏像一体と数巻の経文を届けてきた。

それでも日本からは馬、船、弓矢などを届けただけで軍隊は派遣せず、抜け目なく、お返しに医学博士、易学の権威、暦の学者などの来日を要請している。折角、お経を貰っても難しくて読めなかったのかも知れない。要求した博士たちが日本に到着したのを見届けてから、やっと救援軍が海を渡ったのだが既に百済の王様は暗殺された後だった。日本の外交政策が何となくズレているのは飛鳥時代以来の悪い伝統なのだろうか。

その時代の日本の宗教は伝説を歴史化した「三種の神器」神話が中心であり、特に天皇の身近にあった八咫鏡(やたのかがみ)は天照大神の化身として崇拜されていた。現在では伊勢神宮(内宮)の御神体として天皇家の氏神的存在になっているが、大和朝廷が未だ特定地域の小豪族だった頃は、首長の部屋に八咫鏡が置か

れていたのである。出雲族や三輪氏、石上氏、葛城氏などの協力で大和盆地に王権を確立した崇神大王は、日本の初代天皇として即位するに当り、神鏡を自宅から分離して大和笠縫(奈良県磯城郡田原本町)に祀った。

この時に崇神天皇は、巫女さんの元祖のように神に仕える斎宮(いつきのみや)として皇女の豊鋤入姫命(とよすきいりひめのみこと)を指名した。かつて未開の地だった柿岡方面に初めてやって来て丸山古墳の主とされている豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)のすぐ下の妹である。兄さんは遠征で苦労したが妹のほうも生涯独身で八咫鏡を守るために苦労をした。何しろ王朝の地位が不安定だから、大王(天皇)になりたい候補者が大勢居て、権力が交代する度にシンボルの鏡が狙われる。豊鋤入姫は丹波与謝(鬼が棲んだ大江山の麓)に始まり大和伊豆(大和郡山)、紀の国(和歌山)沿岸、吉備(岡山南部)と鏡と共に場所を変え、最後に崇神王朝発祥の地である大和三輪山の近くに帰ってきた。そこで高齢化を理由に職を解かれ、神鏡を日本武尊の叔母に当る倭姫命(やまとひめのみこと)に渡すように命じられた。権力の交代が推測できる。

日本書紀では「垂仁天皇二十五年三月一日に天照大神(神鏡)を豊鋤入姫命から離し奉りて倭姫命に託し給つ。倭姫命は大神の鎮座されませる場所を求めて云々…」と記しているから、神鏡を奪って大王の地位を得た新勢力も始めは聖地が見つからなくて各地を放浪していたので

あろう。そして伊勢国渡会(わたらい)郡にある五十鈴川上流域に伊勢神宮を創建することになるのである。古代は神憑りする巫女の女性が国家の中心だった。

実は豊鋤姫を邪馬台国の女王・卑弥呼の後継者となった、**キヌイヨ**に宛てる意見もある。卑弥呼の死後、男性が王位に就いたが支持率が悪くて国内が乱れ辞職した。仕方なく卑弥呼の遠縁に当る女性・**キ与**が王位に就いて安定したのである。結局、邪馬台国は大和朝廷の誰かに滅ぼされたらしいのだが…。

八咫鏡を抱えた豊鋤姫が各地を転々としていたのは敵に追われていたからで、卑弥呼と縁が有ったかどうかは判らないが、折角、三輪山で即位した崇神天皇の王朝も長くは続かず、別な勢力が八咫鏡を手に入れた。そして、新王朝も神鏡を安置する聖地、つまり新王朝の精神的基盤とする神域を求めていた。

かつての日本史では伊勢神宮の創建を紀元前にしていたがそれは有り得ず、卑弥呼時代(三世紀)説もあるが、実際には数百年後、恐らくは式年遷宮を決めたといわれる天武天皇時代ではなからうか。天武天皇は「壬申(じんしん)の乱」に天智天皇の子・大友皇子との戦いに勝って天皇の地位を得た。戦闘開始前には兵力を殆ど持たなかった天武天皇が勝つたのは、美濃や伊勢の豪族たちが味方に付いたからである。その功績に報いる意味もあって伊勢国が天皇家の聖地に選ばれたのであろうと次の神話から推測している。

常陸風土記にも登場する日本武尊は八咫鏡を守って伊勢にいた倭姫命から草薙の剣（くさなぎのつるぎ）を借りて、その威光で賊を退治したのだが、常陸国から帰国した後に、素手で伊吹山（岐阜・滋賀県境）に棲む荒振神退治に出かけ逆にやられて病に罹り、伊勢・能褒野（のぼの 鈴鹿）で没する。伊勢国には日本武尊と宝剣に関する伝説もあり、宝剣が熱田神宮（名古屋）に祀られることになった経緯に天武天皇が絡む伝説もある。日本武尊や父親の景行天皇は実在性が薄いから、天智天皇の死後、天武天皇（吉野朝）と弘文天皇（近江朝）が皇位を巡って争った壬申の乱に全ての謎があるような気がする。

蘇我王朝を倒した天智天皇が自分流に国家としての歴史を整理したのだが、息子の弘文天皇が戦に負けて天智色の濃い記録も廃棄されてしまった。弘文天皇も歴代天皇に入れて貰えなかったらしく、後に水戸光圀が「大日本史」で採録したからようやく記録に残ったようなので、勝者・天武天皇に都合の良いように創られた日本史を水戸藩が是正したようなものである。先に述べたように消された蘇我王朝の名前が逆賊としてでも残ったのは奇跡に近い。

飛鳥時代は大和朝廷成立の経緯と宗教の関係などが分からなくなっている。藤原不比等がようやく政権を握ってからは、古事記でも風土記でも藤原氏の祖先が関わった事項は「我田引水」で書いてあり天智天皇系の記録が復活する。そして皇統が天武系から完全に

天智系に戻るのが石岡ゆかりの平国香の祖である桓武天皇からになる。水戸藩も石岡市も「天智派」なのであろう。

天智系没落の原因となった「壬申の乱」は謎が多い。神代時代の霧を払って現代風に解釈すれば、天智天皇の皇太子には同母弟の大海人皇子（天武天皇）が立てられていたが、天智天皇の意図は実子の大友皇子（弘文天皇）にあるらしいと感じた大海人皇子は吉野山に身を退いた。天智天皇の死後、どちらからともなく両者对立関係が生じ、重臣たちが両派に割れる事態が生じた。近江朝廷を継いだ弘文天皇は吉野に籠った形の大海人皇子を召喚しようとしたが、只ならぬ事態を察した大海人皇子の一行が吉野を脱し、伊賀、伊勢から美濃、尾張で軍勢を整えた。尾張の豪族は全面的に協力し、美濃は近江に接しているので支持が両軍に分かれ、伊勢の豪族たちは始め拳兵の呼びかけには応じず、大海人皇子の一行は苦難と不安との行進を余儀なくされた。そのうちに少しずつ味方に付く者が増えて結局は大海人皇子に味方したようである。近江朝廷は関所を塞ぎ、街道を封鎖してから西国の豪族たちに出兵を命じたが思うように集まらず、現役の天皇の軍勢が敗れた。王権が未だ不安定だったことを証明している。「昨日の叔父は今日の敵」そして「勝てば官軍、負ければ賊軍」弘文天皇は明治時代まで第三十九代の天皇から削られていたのである。近江方の敗北は朝廷軍である筈の尾張軍二万が寝返って大海人皇子側に付いたことによる。戦後の論功行賞で

は尾張国が第一とされて伊勢神宮に八咫鏡と共に奉祭されていた草薙の剣を祀る熱田神宮が置かれるようになった。祭神に須佐之男命の名があることで協力した軍勢の主力は出雲族だったかも知れない。

大海人皇子方の軍は伊勢国の北部沿岸部に本陣を置いた。その辺りから関が原方面にかけて各地の関所を落とす近江朝廷軍を包囲するようにして勝利を収めたと考えられる。その地域は、日本武尊が遭難した伝説の残る伊吹山地を避けて東国から都へ通じる古代交通の要所であった。三百数十年の後、その周辺に伊勢の国司として赴任したのが平維衡（たいらのこれひら）である。

下野の豪族・藤原秀郷と協力して平将門を討った平貞盛は、地方豪族でいることを嫌って広大な領地を弟に譲った。此の家系が府中城主の大塚氏になる。石岡を去った貞盛は藤原氏全盛の都に上って久しく下級官僚に甘んじていた。武門の名声は上がったも、武士は公家の用心棒ぐらいいにしに評価されなかった時代である。やっと貞盛の子・維衝の代になって「受領（ずりよつ）」と呼ばれる地方官への登用が許されたのである。伊勢国は神宮が鎮座し、多くの土地は神宮領に指定されていたから、他の国のように国司が甘い汁を吸い難い。それでも平氏はコソコソと伊勢で地盤を固め、維衝から四代目の正盛から武士団としても中央に知られるようになった。正盛の子がかの平清盛である。

遡って日本に仏教が伝来した当時は、天照大

神に象徴される神教が大和朝廷の王権と結び付いて一般にも徐々に浸透し始めていたから、生え抜きの物部氏などが仏教導入に猛反対をした。有力な部族は多かったから、皇統も主張できる新興勢力の蘇我氏は物部氏排斥の意図もあつて仏教を強力に擁護し勢力拡張を図り文化面で優位に立とうとしたのであろう。

齋明天皇時代に「イラン系の人々(トカラ人)が日本に漂着した」とする日本書紀の記事を紹介したが、良く考えるとこれは変である。西暦657年に男二人、女四人が来たのに3年後には数十人が帰国している。これについて松本清張先生は「蘇我氏が意図的に大勢のイラン人を日本に呼び寄せていた」と解釈されたのだが、そのことを示す当時のニュースがある。漂着したイラン人たちは日本最初の寺院である飛鳥寺に来て七月十五日にお盆の行事に参加しているのである。始めてやってきた言葉も分らない国で宗教行事などに加われる筈がないのだが、平気な顔(推測)で出席しているところから、既に仲間が居たと想像できるし、第一に「お盆の行事」はイラン人が祖先の霊を招くために行っていた行事であり、「盂蘭盆会(うらぼん)」は死者たちの祭り」という意味のペルシア語「ウラワン」からきているのだと学者は説いている。

九州に漂着したトカラ人は最初から仲間のいる日本に来るつもりで船出したのであろう。飛鳥には蘇我氏が呼び寄せた大勢の異邦人が居て蘇我氏滅亡後も特定の技術者集団として存在していた。東の端に位置する日本には多くの物

資や風習だけでなく海流に乗った漂流民や、贈り物として連れて来られた人たちも多かった。佐渡島に伝わる「鬼伝説」は身体の大きい異国人が漂着して始めは疎外されながらも同化していった経緯を物語っている。大相撲にも「佐渡ヶ嶽部屋」がある。朝鮮半島や中国大陸とは意図的な人事の交流があつたろう。

イラン・イラク戦争が終り、8年ぶりに平和が訪れたイランで国民が最大の楽しみとしていたのは映りの悪いテレビであつた。厳格なシア派イスラムの国家では日本のように「馬鹿らしい番組」は放映できない。民衆が待ち望んだ番組が日本から輸入したドラマ「おしん」である。「貧困にもめげず逆境にもくじけず健気に生きる」主人公に共感したようで大人も子供も放送の時間を待ち望んで、テレビのある公共施設などには大勢の人だかりが出来ていた。

飛鳥の酒船石で作られた麻薬性のあるハオマ酒は論外だが、果物を産するイランでは自家製のワインなどが簡単に醸造できる。イスラム教徒は禁酒が原則ながら勝手に果物を発酵させて飲む分には黙認されていたのだが、イスラム原理主義の発展で密造には厳罰が科せられるようになった。大人もテレビで「おしん」を見るぐらいしか娯楽がなくなった。さらに当局は密造の摘発に密告制を適用したのである。「昨日の友は今日の敵」密造は無くなったが人間同士の信頼関係に暗い影を落としたことは想像できる。イランの王朝も日本の朝廷も、目まぐるしい権力の交代があつて今日に及んでいる。どの様な

国家にするかはその国が決めることではあるが、他国への侵略や他国に脅威を与える行動は許されるものではない。「昨日の友は今日の敵」は自ら招く不幸である。陰惨な過去を持つ建国の歴史は変えられないが現在の国民が創出する未来の歴史は平和の歴史であらねばならないと思う。飛鳥の異邦人が海を渡って来た目的は文化の交流にあつたのである。

(日々の風に一行の呟く)

弥生の中にいて

伊藤三子

- ・遠き日の友の話が風の中に
- ・老婆の通つたあとに鼻歌の残つて
- ・菜の花と花大根(諸葛菜)競つて咲く駅
- ・彼岸は雲におおわれて
- ・菜の花の陰に青いつなぎの人見えて
- ・地藏堂にのびた坂道老婆くる

編集後記

ふるさと、風」と名称を衣替。ふるさとを自分の言葉に落とし、風となつて舞え。そんな気持ちで出来るだけ長く続けて行きたいと思つていきます。

編集事務局

〒3150001 石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)